

霧島山の火山活動解説資料（令和 7 年 3 月）

福岡管区气象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方气象台

えびの高原（硫黄山）周辺

硫黄山では、活発な噴気活動が続いています。硫黄山付近の浅いところを震源とする火山性地震は少ない状態で経過しています。

硫黄山では、現時点では噴火の兆候は認められませんが、活火山であることから、現在活発な噴気活動がみられている硫黄山火口内、及び硫黄山の西側 500m の噴気地帯から概ね 100m の範囲では、熱水・熱泥等が飛散する可能性がありますので注意してください。また、火山ガスにも注意が必要です。

地元自治体等が行う立ち入り規制に従うとともに、火口周辺や噴気孔の近くにはとどまらないでください。

噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴気など表面現象の状況（図 1、図 2、図 3、図 4-①②）

監視カメラによる観測では、硫黄山の南側の噴気地帯で噴気が最高で 300m 以上まで上がるなど、活発な噴気活動が続いています。同噴気地帯では、一部の噴気孔からの熱水の流出を時々確認しました。硫黄山の西側 500m 付近の噴気地帯では、噴気は観測されませんでした。

5 日及び 19 日に実施した現地調査では、硫黄山の南側の噴気地帯において、活発な噴気活動が引き続き認められました。前回観測（2023 年 11 月 21 日）と比較して硫黄山火口内南東側斜面の地熱域がわずかに拡大していることが認められました。また、硫黄山西側 500m 付近では噴気は確認されませんでした。

・地震や微動の発生状況（図 4-③④⑤、図 5）

硫黄山付近の浅いところを震源とする火山性地震の月回数は 26 回と少ない状態で経過しています（2 月：19 回）。火山性微動は 2023 年 7 月 8 日以降観測されていません。

えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）では、火山性地震の月回数は 34 回で、前月（2 月：54 回）と同程度でした。

震源の求まった火山性地震は、主に韓国岳付近の深さ 1～2 km 付近、韓国岳の北東側約 1～3 km の深さ 2～8 km 付近、大浪池付近の深さ 1～5 km 付近、甕岳付近の深さ 1 km 付近及びえびの岳付近の深さ 2 km 付近に分布しました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和 7 年 4 月分）は令和 7 年 5 月 12 日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、宮崎県及び鹿児島県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・地殻変動の状況（図4-⑥、図6、図7）

GNSS 連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023 年 5 月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが、同年 11 月頃から停滞しています。

・全磁力変化の状況（図8）

全磁力観測では、観測を開始した 2016 年 2 月以降、硫黄山北側の観測点で全磁力の増加、南側の観測点で全磁力の減少といった、硫黄山周辺の地下での熱の高まりを示す変化が観測されています。



図 1-1 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山付近の状況
（3月19日、えびの高原監視カメラ）

硫黄山の南側の噴気地帯では、噴気が最高で 300m 以上まで上がるなど、活発な噴気活動が続いています。

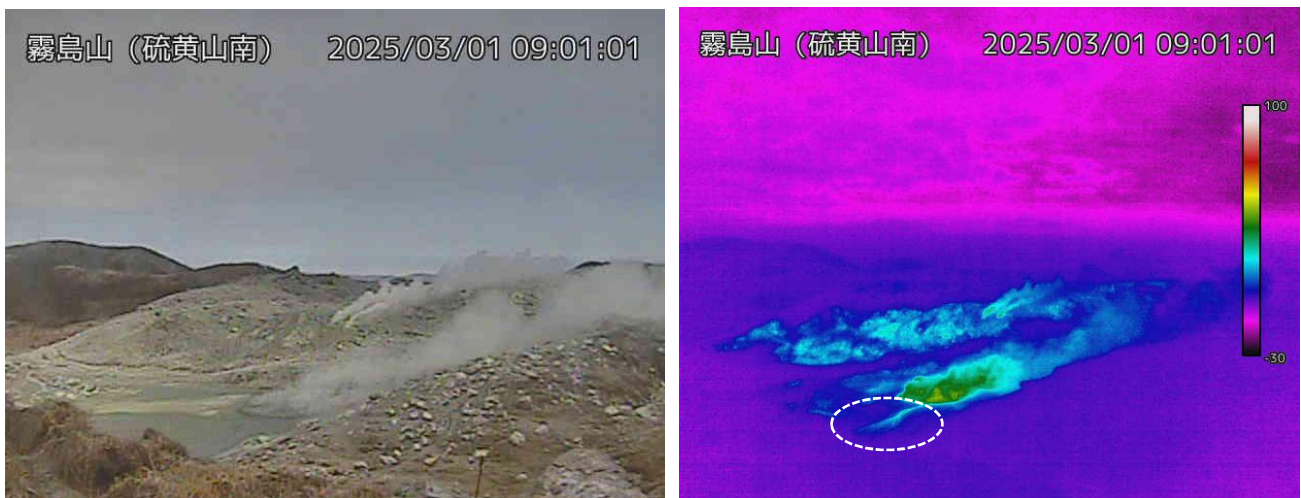


図 1-2 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山南側の状況（3月1日、硫黄山南監視カメラ）

硫黄山の南側の噴気地帯では、活発な噴気活動が続いています。同噴気地帯では、一部の噴気孔からの熱水の流出を時々確認しました（白破線内）。



図2 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 図3の観測位置及び撮影方向

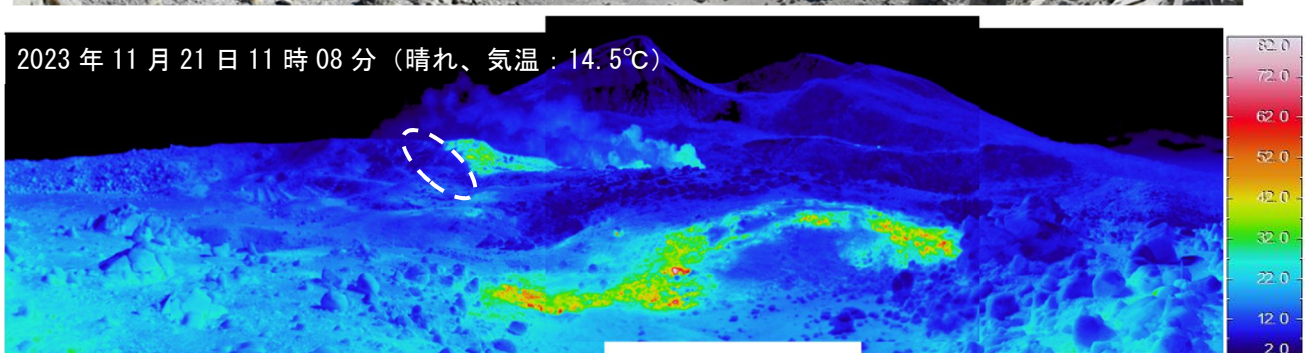
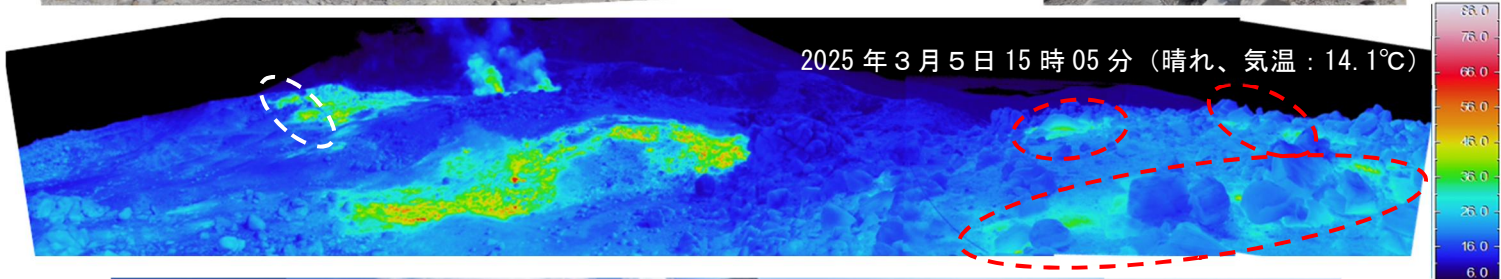
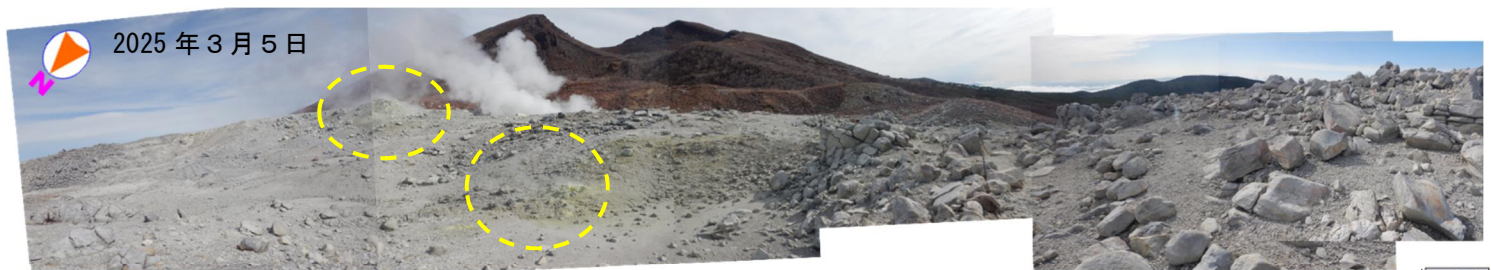


図 3-1（前ページ） 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）硫黄山火口内南東～南西側の地熱域の状況

- ・硫黄山火口内南東及び南西側から弱い白色の噴気が上がっていることを確認しました（黄破線内）。
- ・硫黄山火口内南東側の地熱域がわずかに拡大していることが認められました（白破線内）。
- ・硫黄山火口縁南西側にも地熱域が分布していることを確認しました（赤破線内）。

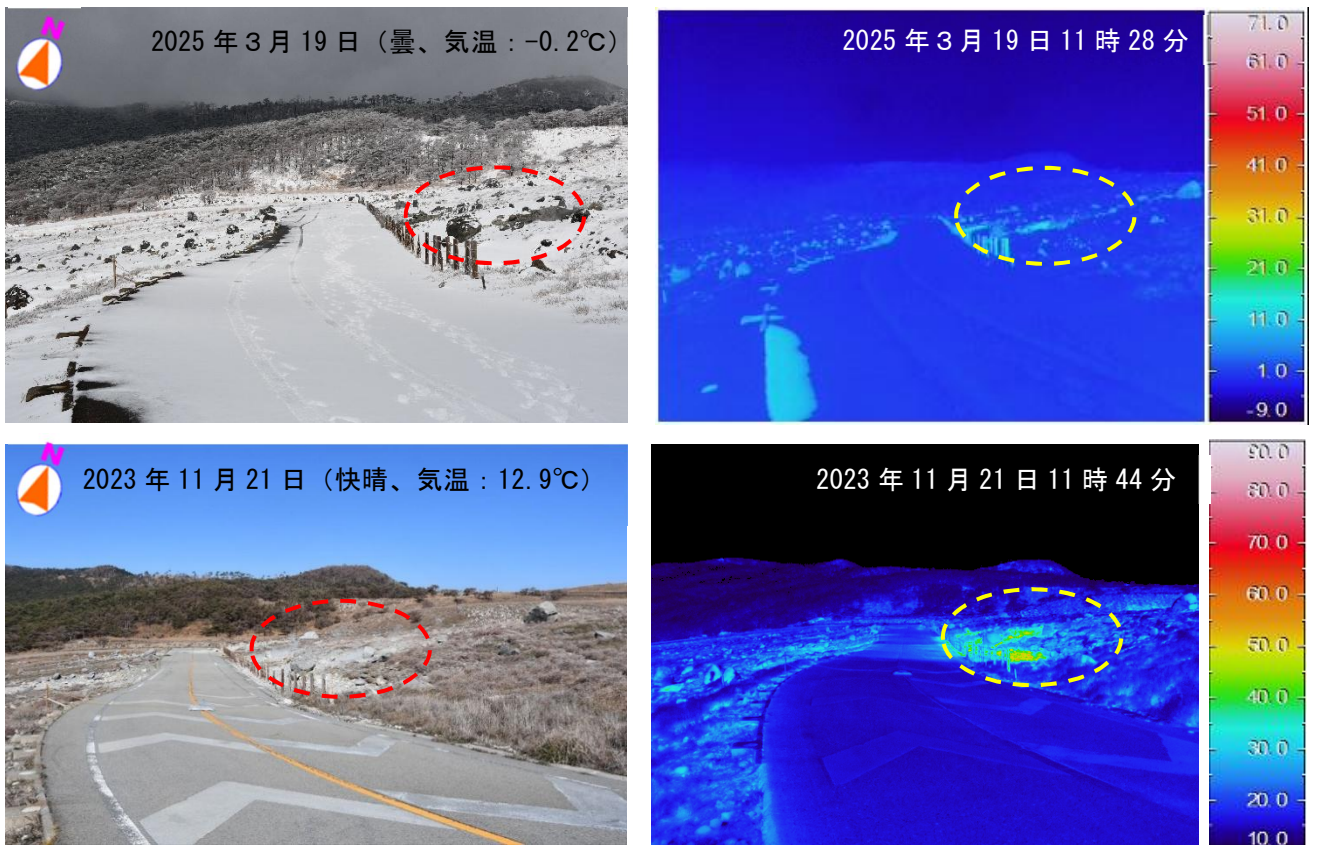


図 3-2 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山の西南西側の地熱域の状況

道路東側では、弱い噴気を確認しました（赤破線内）。積雪の影響を受けている可能性があります。前回（2023 年 11 月 21 日）と比較して、地熱域の温度低下と縮小を確認しました（黄破線内）。

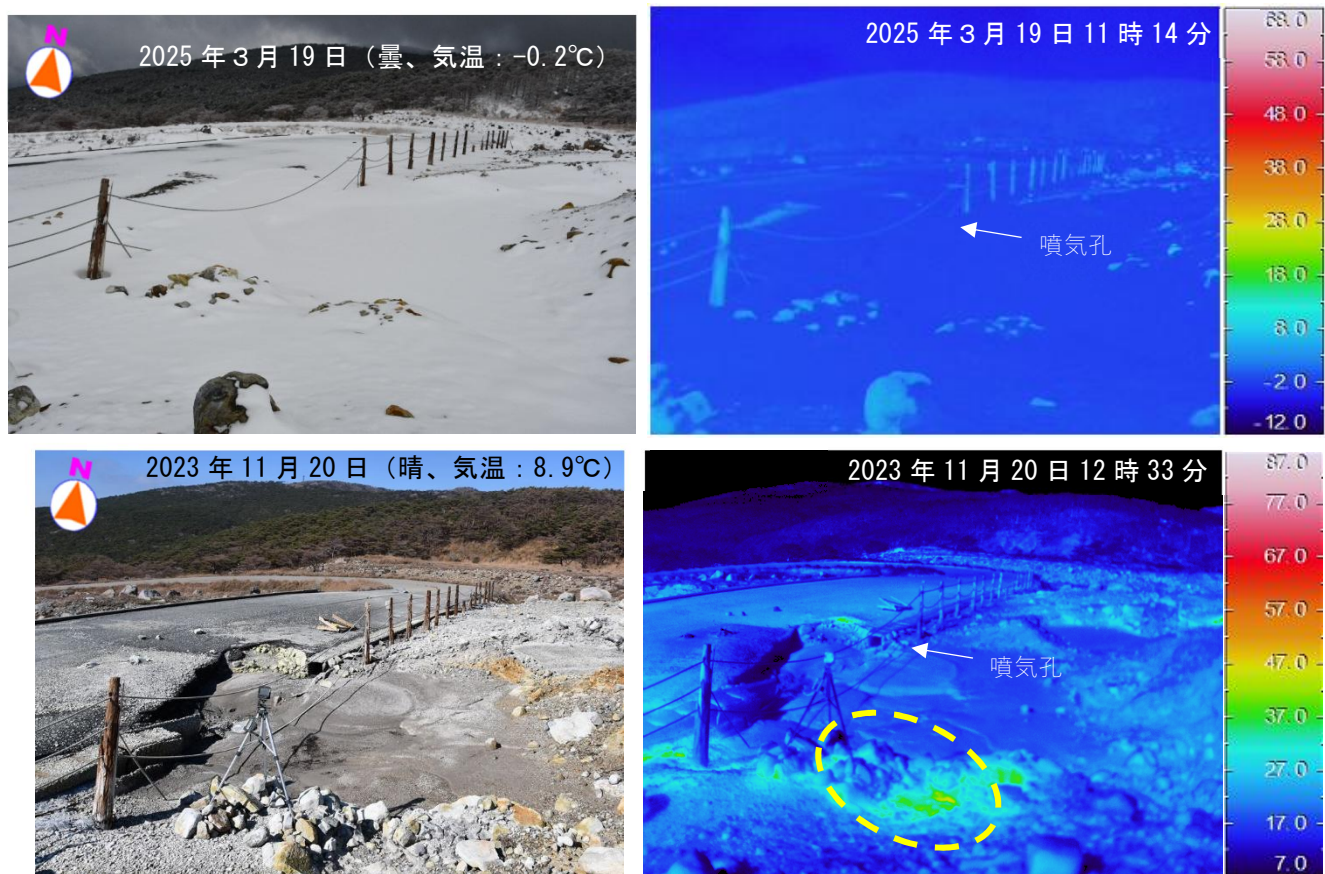


図 3-3 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 硫黄山の西側 500m 付近の地熱域の状況

硫黄山西側 500m 付近の噴気孔では噴気は確認されず、前回（2023 年 11 月 20 日）認められた地熱域は雪で覆われていました（黄破線内）。

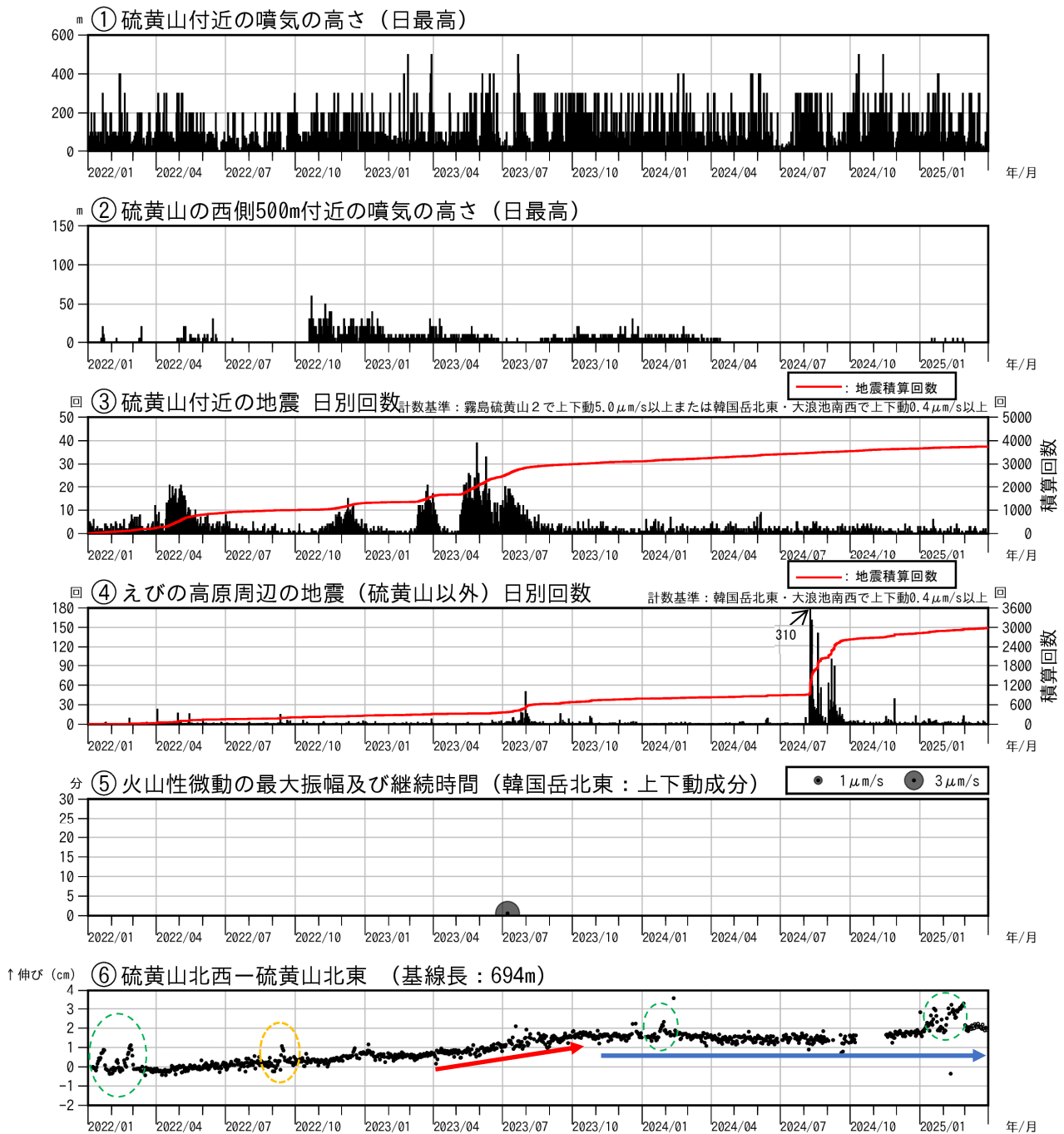


図4 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 火山活動経過図（2022年1月～2025年3月）

< 3月の状況 >

- ・監視カメラによる観測では、硫黄山の南側の噴気地帯で噴気が最高で300m以上まで上がるなど、活発な噴気活動が続いています。硫黄山の西側500m付近の噴気地帯では、噴気は観測されませんでした。
- ・硫黄山付近の浅いところを震源とする火山性地震の月回数は26回と、少ない状態で経過しています（2月：19回）。
- ・えびの高原周辺（韓国岳～韓国岳北東側周辺及び大浪池周辺）では、火山性地震の月回数は34回で、前月（2月：54回）と同程度でした。
- ・火山性微動は2023年7月8日以降観測されていません。
- ・GNSS連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023年5月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが（赤矢印）、同年11月頃から停滞しています（青矢印）。

⑥の基線は図7の①に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

⑥の緑色破線内の変化は地面の凍上の影響、橙色破線内の変化は台風等の気象要因によるものと考えられます。

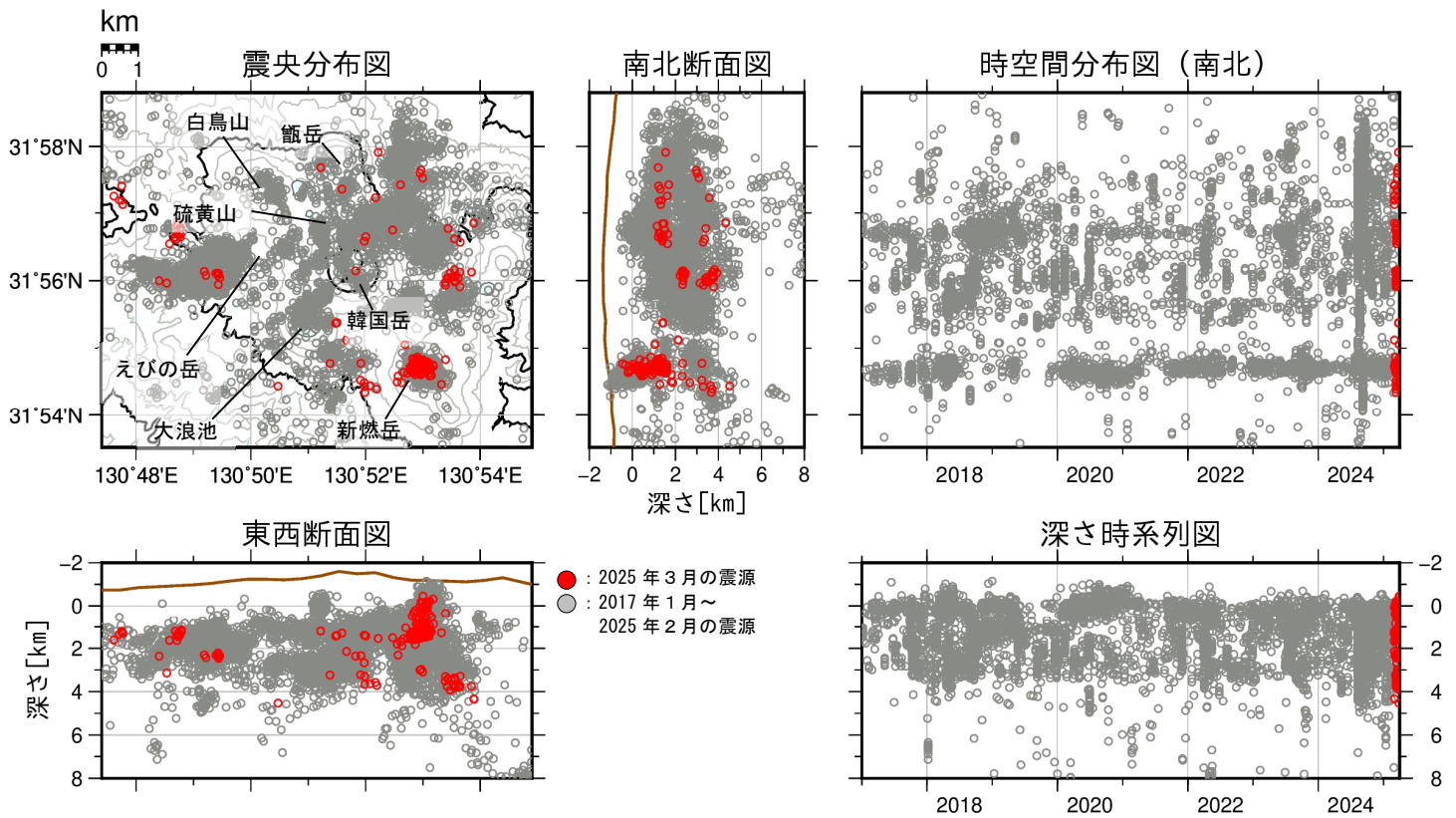


図5 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 震源分布図（2017年1月～2025年3月）

< 3月の状況 >

震源の求まった火山性地震は、主に韓国岳付近の深さ1～2km付近、韓国岳の北東側約1～3kmの深さ2～8km付近、大浪池付近の深さ1～5km付近、甑岳付近の深さ1km付近及びえびの岳付近の深さ2km付近に分布しました。

※2018年10月は、観測点の障害により、硫黄山近傍で震源が求まらなかった期間があります。

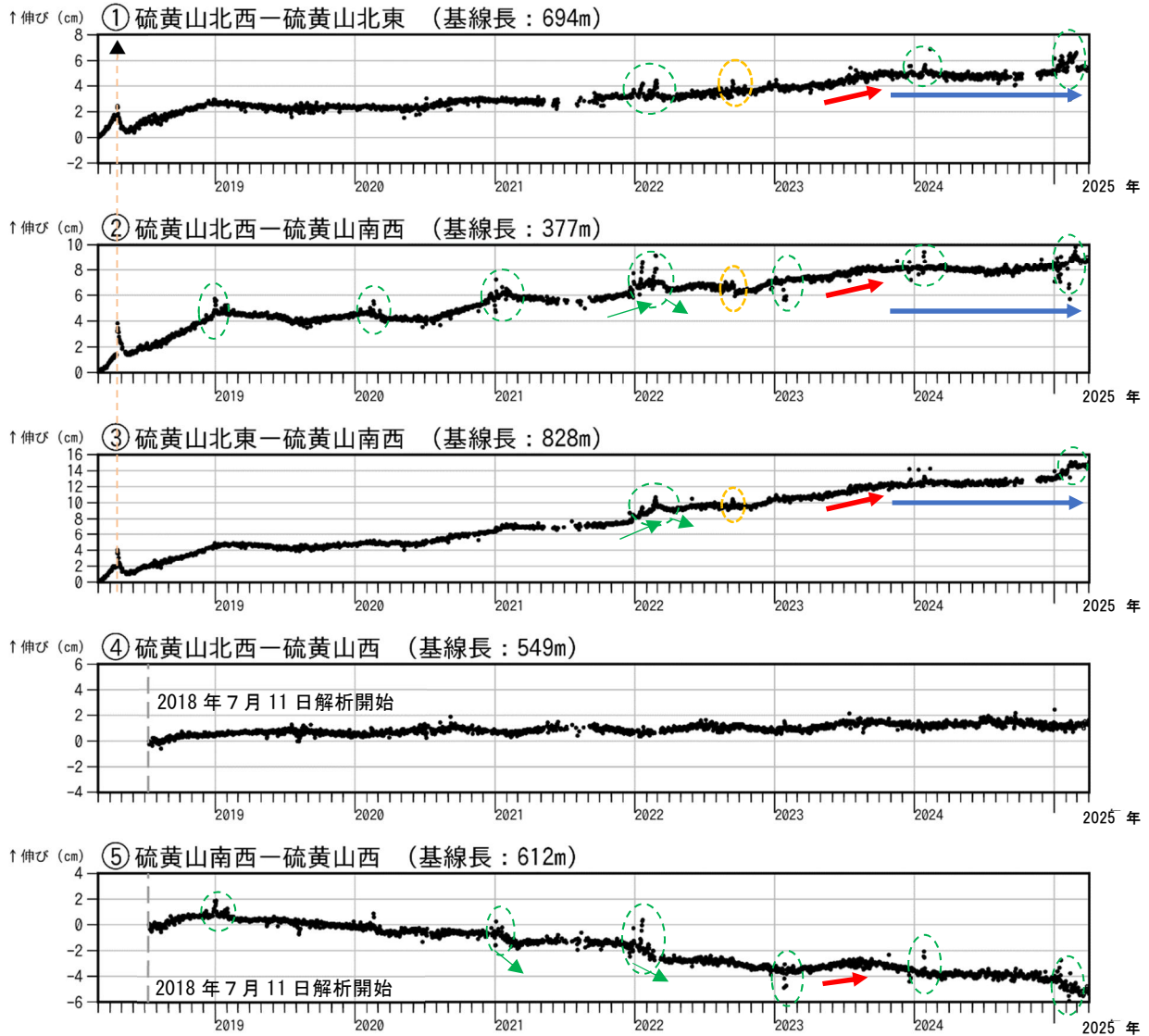


図6 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） GNSS 連続観測による基線長変化（2018年3月～2025年3月）

GNSS 連続観測では、硫黄山近傍の基線において、2023年5月頃から硫黄山の山体浅部における膨張を示すと考えられるわずかな伸びがみられていましたが（赤矢印）、同年11月頃から停滞しています（青矢印）。

これらの基線は図7の①～⑤に対応しています。

直近のデータは白丸で示しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

緑色の破線内の変化は地面の凍上の影響、橙色の破線内の変化は台風等の気象要因の影響と考えられます。

②③⑤の基線において2021年1月及び同年12月頃から2022年3月頃にかけて認められる変化（緑矢印）は、硫黄山南西観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

図上部の黒三角及び橙破線は、2018年4月19日及び26日の噴火の発生を示しています。

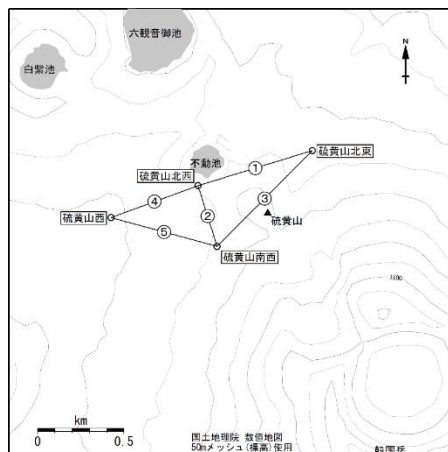


図7 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 図4及び図6のGNSS 連続観測点と基線番号

白丸（○）は気象庁の観測点位置を示しています。



図 8-1 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 全磁力観測点配置図

2016 年 2 月の観測開始以降の各観測点の全磁力の変化傾向（図 8-2 の変化傾向）を「■（増加傾向）」「■（減少傾向）」「■（傾向なし、またはデータ不足等により傾向不明）」でそれぞれ示しています。



図 8-2 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺） 全磁力観測点で観測された全磁力変動
（2016 年 1 月～2025 年 3 月）

観測開始（2016 年 2 月）以降、硫黄山の北側の観測点で全磁力の増加（赤矢印）、南側の観測点では全磁力の減少（青矢印）といった、硫黄山周辺の地下での熱の高まりを示す変化が観測されています。

各観測点と地磁気観測所鹿屋観測施設（硫黄山の南約 60km）の全磁力差分値のうち、電離層の影響が小さくなる夜間の平均値（00:00～02:59（JST））を求め、日値としてプロットしています。

図上部の黒三角及び橙破線は、2018 年 4 月 19 日及び 26 日の噴火の発生を示しています。

空白部分は欠測を示しています。

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、火口直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。火口周辺で観測した全磁力の値は、南側Aでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Bでは強められて大きくなることがわかります（図8-3）。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

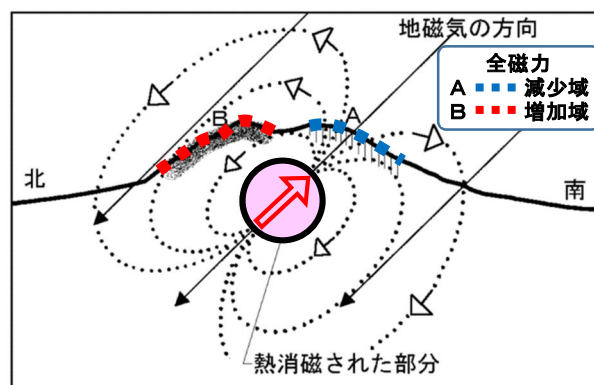


図8-3 熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

観測点の全磁力変化	地下の岩石の磁化	火山体内の温度変化
北側で 増加 南側で 減少	消磁	上昇
北側で 減少 南側で 増加	帯磁	低下

大幡池

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。

活火山であることから、規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性がありますので、留意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図1、図2-①）

監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

・ 地震や微動の発生状況（図2-②、図3）

火山性地震の月回数は25回で、前月（2月：2回）と比較して増加しました。13日には23回と一時的に火山性地震が増加しました。

震源の求まった火山性地震は、大幡池の西側1km付近の深さ3～4km付近に分布しました。

火山性微動は観測されませんでした。

・ 地殻変動の状況（図4、図5）

GNSS 連続観測では、大幡池及び大幡山を挟む基線には、特段の変化は認められません。



図1 霧島山（大幡池） 大幡池及び大幡山の状況（3月20日、八久保監視カメラ）

監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

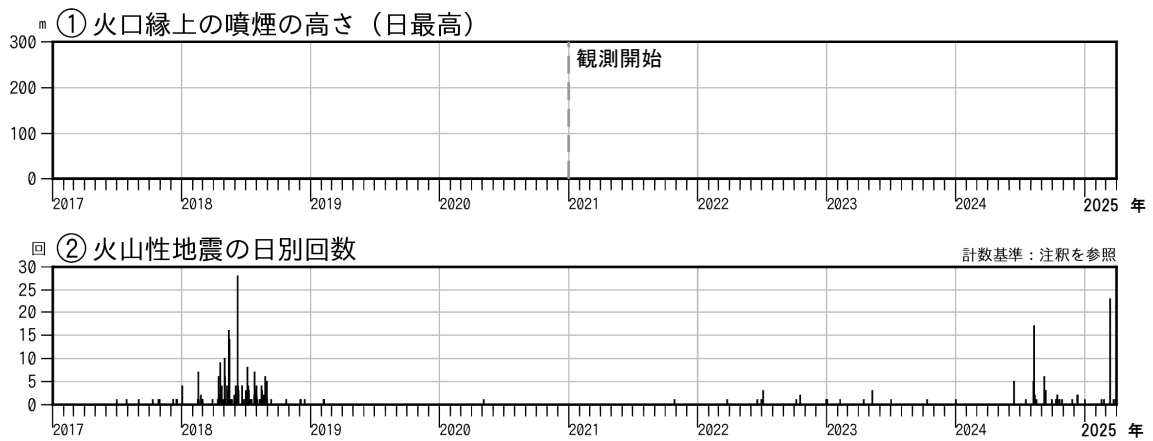


図2 霧島山（大幡池） 火山活動経過図（2017年1月～2025年3月）

< 3月の状況 >

- ・監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。
- ・火山性地震の月回数は25回で、前月（2月：2回）と比較して増加しました。3月13日には23回と一時的に火山性地震が増加しました。

大幡池付近の火山性地震の回数について、2020年12月31日までは「新燃岳南西観測点（計数基準 水平動：2.0 μ m/s）」で計数していましたが、大幡池付近の地震活動をより正確に捉えるため、2021年1月から「大幡山登山口観測点（計数基準：南北成分：6.0 μ m/s）」で計数しています。

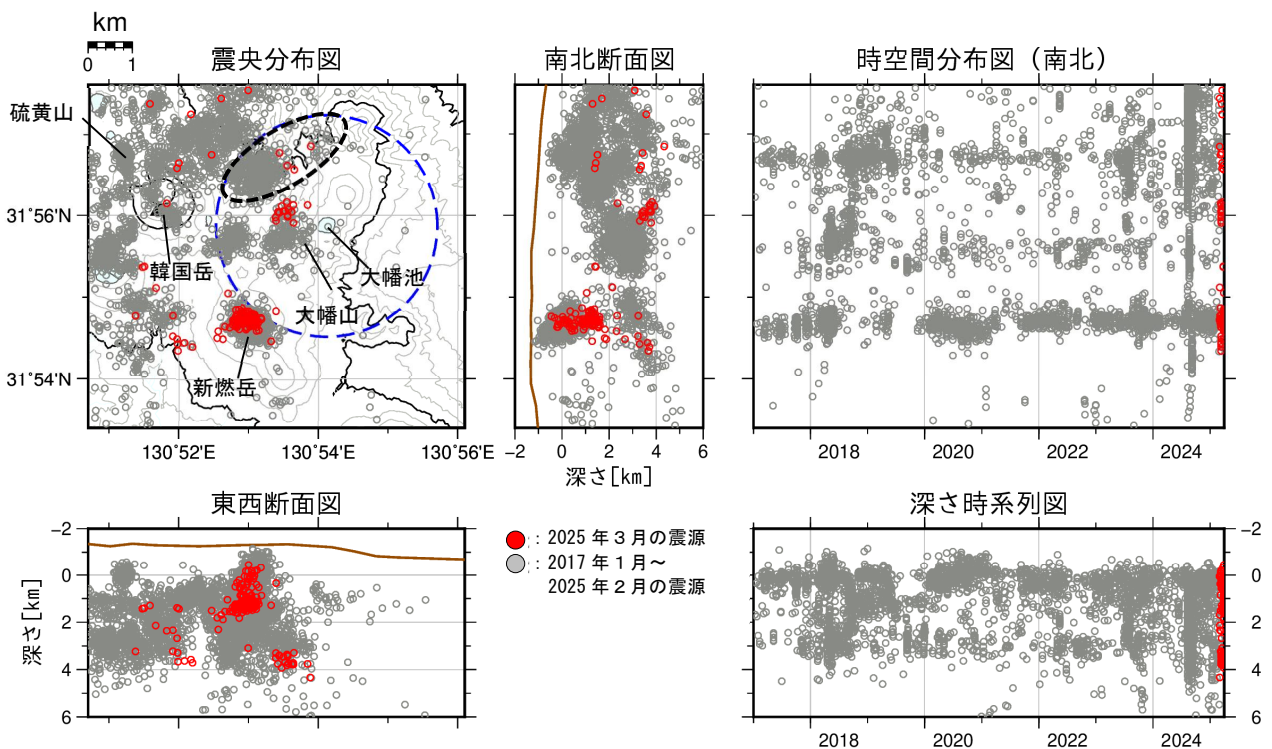


図3 霧島山（大幡池） 震源分布図（2017年1月～2025年3月）

< 3月の状況 >

震源の求まった火山性地震は、大幡池の西側1km付近の深さ3～4km付近に分布しました。

霧島山（大幡池）の火山活動については、主に大幡池及び大幡山付近（青破線内）の地震活動に注目して監視しています。大幡池及び大幡山付近では、新燃岳の火山活動が活発であった2018年3月から7月にかけて火山性地震の増加がみられたことがあります。

大幡池の北西側の地震（黒破線内）は、えびの高原周辺の地震として計数しています。

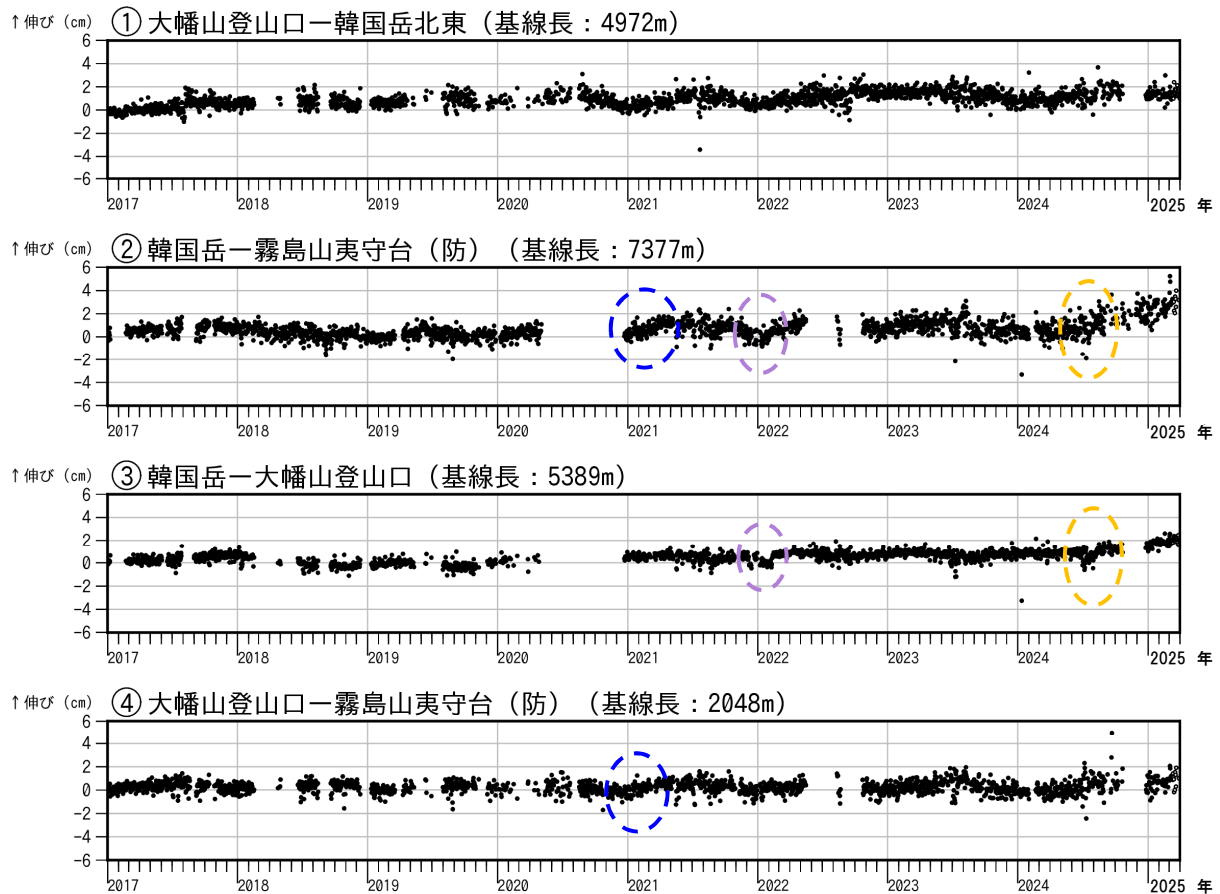


図4 霧島山（大幡池） GNSS 連続観測による基線長変化（2017年1月～2025年3月）

GNSS 連続観測では、大幡池及び大幡山を挟む基線には、特段の変化は認められません。

これらの基線は図5の①～④に対応しています。

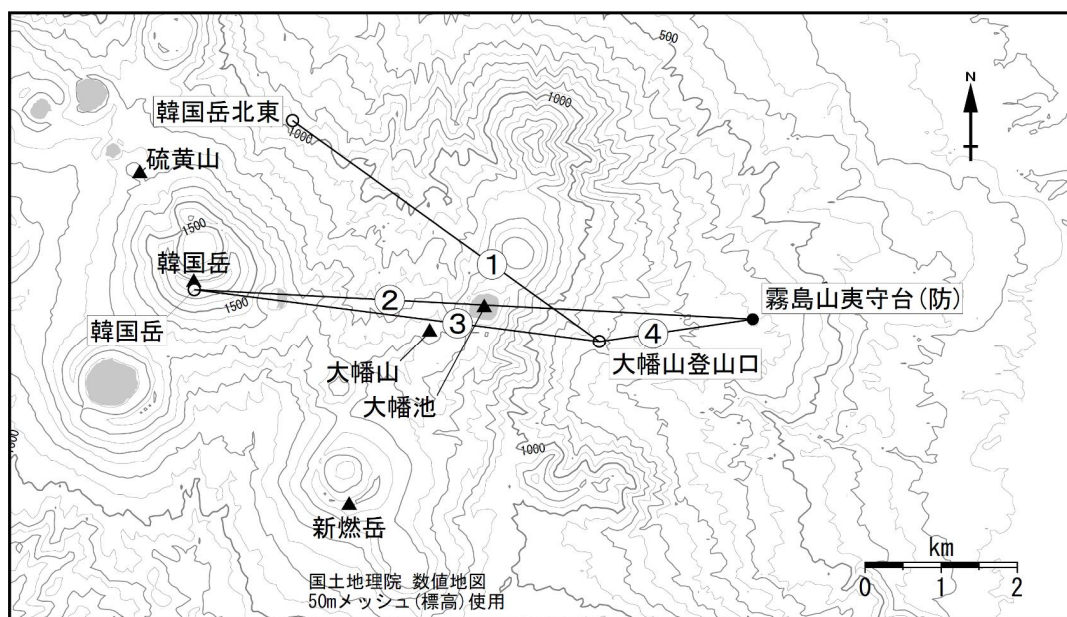
直近のデータは白丸で示しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

青色の破線内の変化は、霧島山夷守台(防)観測点の局所的な変化に伴うものと考えられます。

紫色の破線内の変化は、韓国岳観測点の局所的な変化に伴うものと考えられます。

橙色の破線内の変化は、2024年8月8日の日向灘の地震による変動です。

(防)：防災科学技術研究所



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(防)：防災科学技術研究所

図5 霧島山（大幡池） GNSS 連続観測点と基線番号

新燃岳

新燃岳では、3 月 30 日に火山性地震の増加とともに、新燃岳近傍に設置している傾斜計で山体の膨張を示す地殻変動がみられました。このことから、火山活動が高まっていると判断し、同日 03 時 53 分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを 2（火口周辺規制）から 3（入山規制）に引き上げました。

その後、同日朝から昼前にかけて、新燃岳火口内の白色噴煙の量が一時的に増加しましたが、地震回数は減少するとともに、さらなる山体の膨張を示す地殻変動も認められません。また、噴火は観測されておらず、噴煙の量にも特段の変化は認められません。このことから、火山活動のさらなる活発化がみられないと判断し、4 月 2 日 11 時 00 分（期間外）に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベル 3（入山規制）を維持しつつ、警戒が必要な範囲を概ね 4 km から概ね 3 km に縮小しました。

弾道を描いて飛散する大きな噴石が新燃岳火口から概ね 3 km まで、火砕流が概ね 2 km まで達する可能性があります。そのため、新燃岳火口から概ね 3 km の範囲では警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

2011 年と同様に爆発に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図 1、図 2、図 5-①②）

新燃岳火口では、噴煙の高さは概ね火口縁上 200m 以下で経過しました。韓国岳監視カメラによる観測では、30 日 08 時頃から 10 時頃にかけて新燃岳火口内の白色噴煙の量が一時的に増加しました。新燃岳火口内における地熱域の状況に特段の変化は認められていません。新燃岳火口西側斜面割れ目付近ではわずかな地熱域を確認しました。

5 日に新湯温泉付近から実施した現地調査では、2018 年噴火で流下した溶岩の上部及び新燃岳火口西側斜面割れ目付近でわずかな地熱域を確認しました。新燃岳火口西側斜面割れ目付近からの噴気は認められませんでした。

30 日に気象庁機動調査班（JMA-MOT）が実施した現地調査では、地熱域の状況などに火山活動の活発化を示すような特段の変化は認められませんでした。

・ 地震や微動の発生状況（図 3、図 4、図 5-④⑤、図 6）

新燃岳では、2024 年 10 月下旬頃から火口直下を震源とする火山性地震が増減を繰り返しており、多い状態で経過しました。28 日頃から地震回数が増加し、30 日には前 24 時間の地震回数が 200 回を超えましたが、その後は減少しています。新燃岳付近の火山性地震の月回数は 1,092 回で、前月（2 月：699 回）と比較して増加しました。

震源が求まった火山性地震は、新燃岳火口直下の深さ 0～2 km 付近及び新燃岳西側の深さ 2～4 km 付近に分布しました。継続時間の短い微動が時々発生しました。また、30 日 02 時 56 分には、継続時間が 10 分間程度の火山性微動が発生しました。

・地殻変動の状況（図5-⑥、図7、図8）

GNSS 連続観測では、2024 年 11 月頃から、霧島山を挟む一部の基線で新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められます。霧島山深部の膨張を示す変化は認められません。

新燃岳近傍の傾斜計では、30 日 02 時 50 分頃から山体の膨張を示す 0.1 マイクロラジアン以上の地殻変動を観測し、その後収縮を示す変動がみられました。

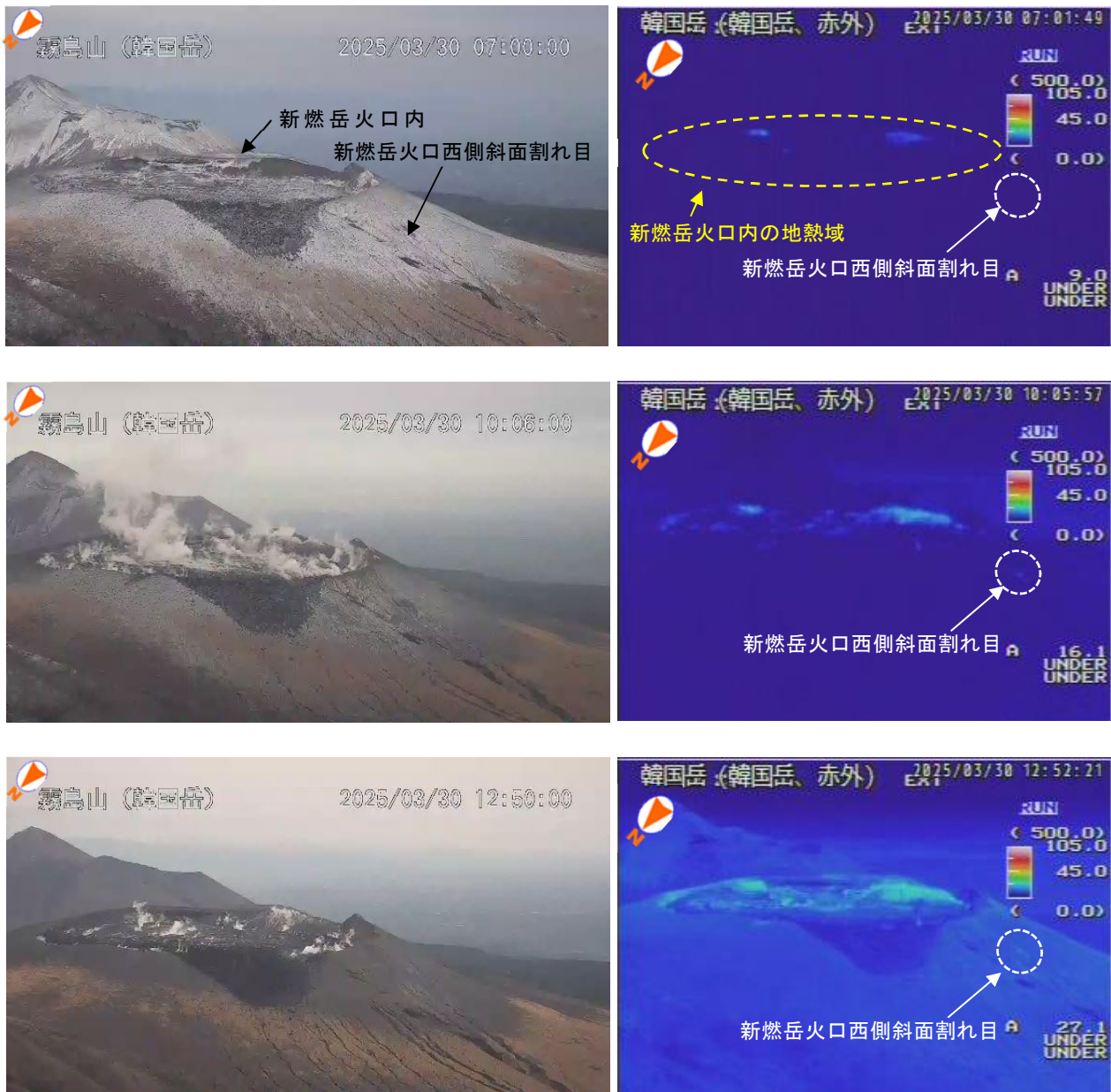


図1 霧島山（新燃岳） 噴煙及び地熱域の状況（韓国岳監視カメラ）

（上段：3月30日07時頃、中段：30日10時06分頃、下段：30日12時50分頃）

- ・新燃岳火口では、3月30日08時頃から白色噴煙の量が一時的に増加し、同日10時頃には噴煙の高さが火口縁上200mに達しました。
- ・新燃岳火口西側斜面の割れ目では、噴気は観測されませんでした。
- ・新燃岳火口内（黄色破線内）の地熱域の状況には、特段の変化は認められませんでした。
- ・新燃岳火口西側斜面の割れ目付近ではわずかな地熱域を確認しました（白色破線内）。

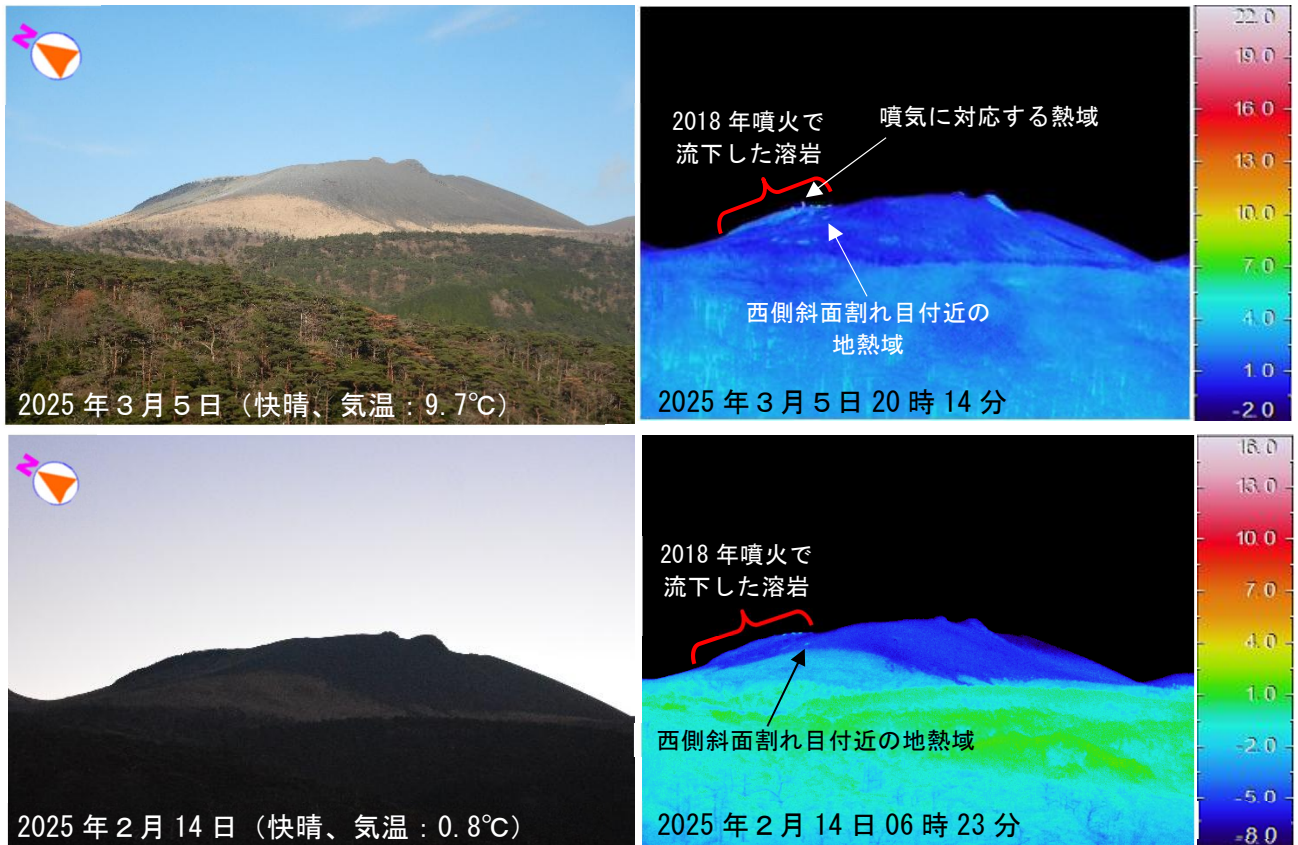


図 2-1 霧島山（新燃岳） 新燃岳南西側の状況（新湯温泉付近からの観測）

- ・ 5 日に新湯温泉付近から実施した現地調査では、2018 年噴火で流下した溶岩の上部及び新燃岳火口西側斜面割れ目付近でわずかな地熱域を確認しました。
- ・ 2018 年噴火で流下した溶岩の上部において高さ約 10m の弱い噴気が上がっていることを確認しました。
- ・ 新燃岳火口西側斜面割れ目付近からの噴気は認められませんでした。

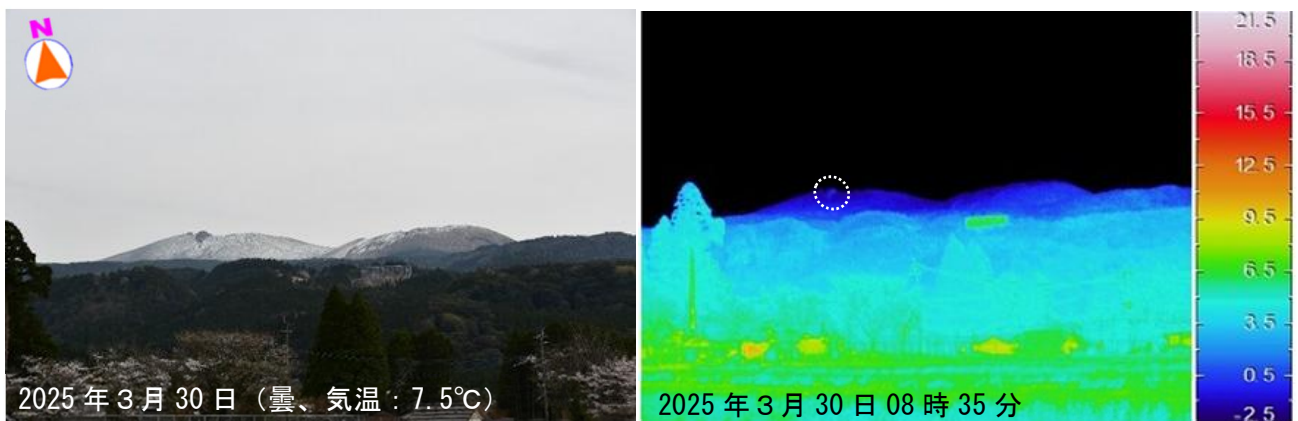


図 2-2 霧島山（新燃岳） 新燃岳南側の状況（霧島市霧島田口から観測）

- ・ 30 日に気象庁機動調査班（JMA-MOT）が霧島田口から実施した現地調査では、火口縁南側でわずかな地熱域（白色破線内）を確認しましたが、特段の変化は認められませんでした。
- ・ 火口縁を越える噴煙や新燃岳南側斜面の噴気は認められませんでした。

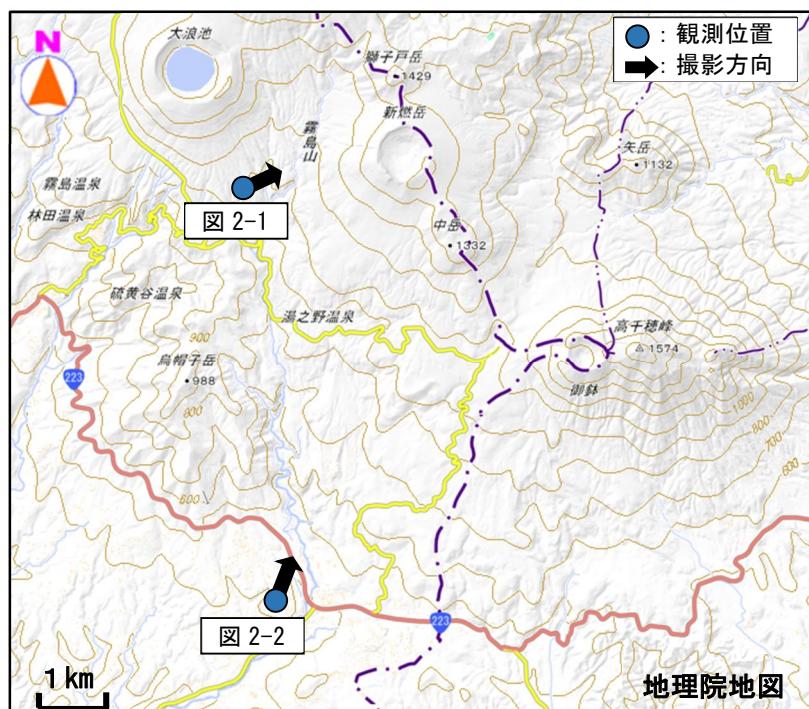


図 2-3 霧島山（新燃岳） 図 2-1, 2 の観測位置及び撮影方向

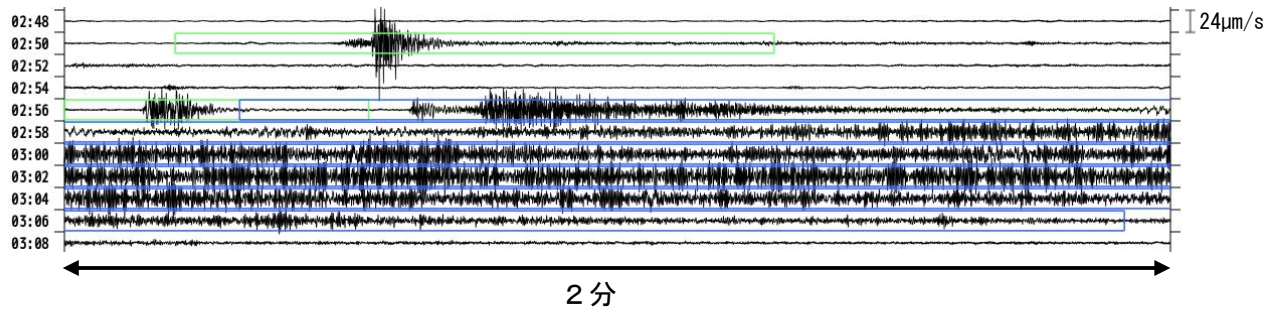


図 3 霧島山（新燃岳） 30 日 02 時 56 分に発生した火山性微動の状況
（新燃西（震）地震計：速度波形南北動成分）

30 日 02 時 56 分に継続時間が 10 分間程度の火山性微動が発生しました（青枠内）。

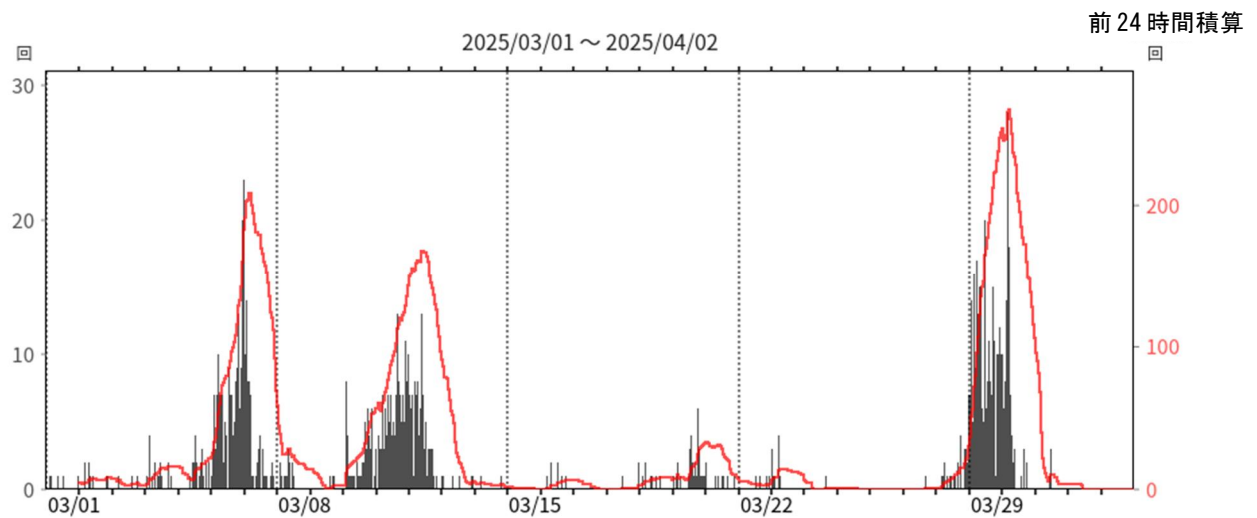


図 4 霧島山（新燃岳） 火山性地震の時間別回数及び前 24 時間積算回数（赤線）
（2025 年 3 月 1 日 00 時 00 分～ 4 月 3 日 00 時 00 分（期間外））

新燃岳の火口直下を震源とする火山性地震は増減を繰り返しています。3 月 28 日頃から地震回数が増加し、30 日には前 24 時間の地震回数が 200 回を超えましたが、その後は減少しています。

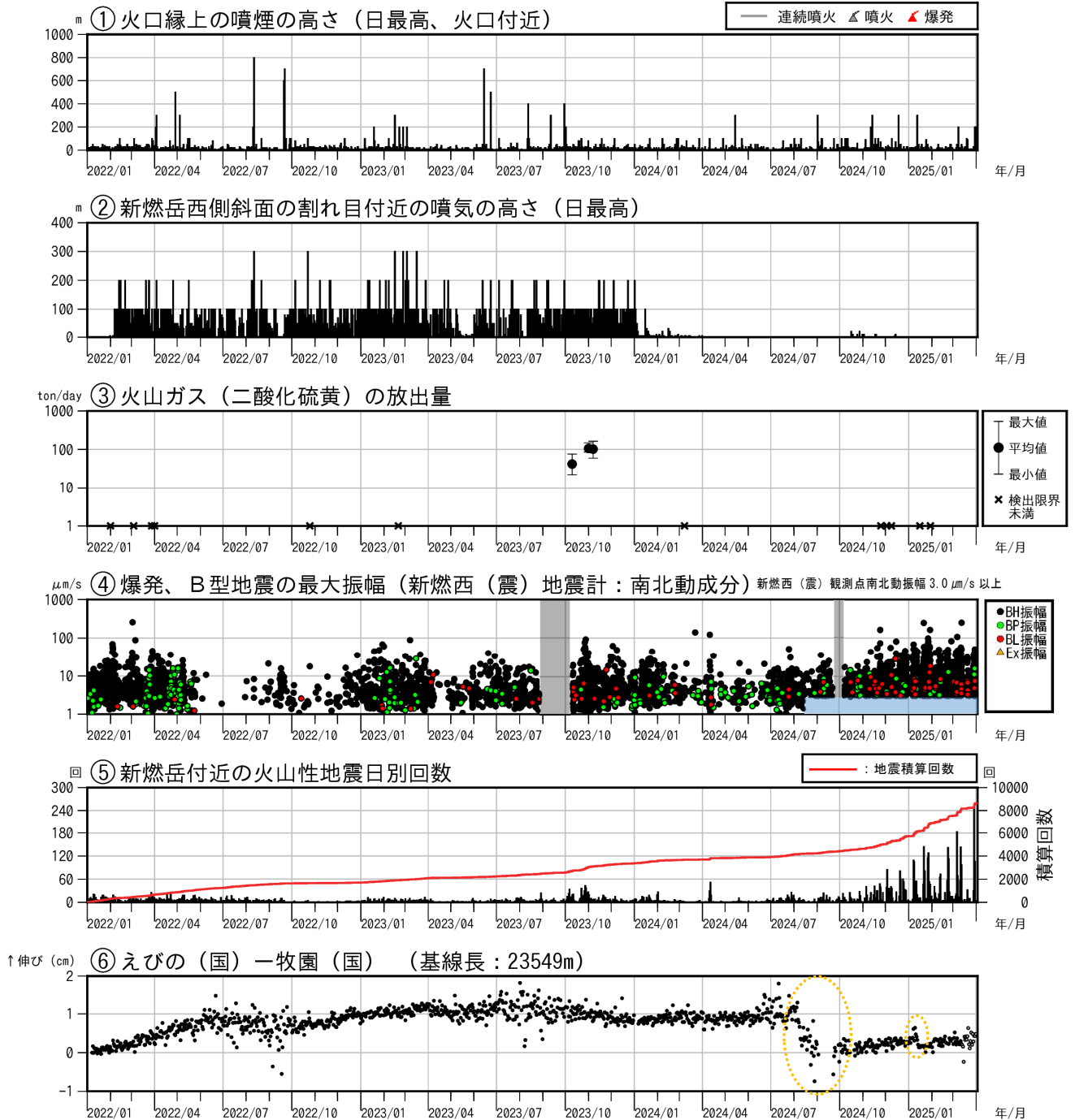


図5 霧島山（新燃岳） 火山活動経過図（2022年1月～2025年4月2日（期間外））

<3月～4月2日（期間外）までの状況：30日に噴火警戒レベルを2から3に引き上げました>

- ・新燃岳火口では、噴煙の高さは概ね火口縁上 200m以下で経過しました。新燃岳火口西側斜面の割れ目では、噴気は観測されませんでした。
- ・新燃岳では、2024年10月下旬頃から火口直下を震源とする火山性地震が増減を繰り返しており、多い状態で経過しました。28日頃から地震回数が増加し、30日には前24時間の地震回数が200回を超えましたが、その後は減少しています。新燃岳付近の火山性地震の月回数は1,092回で、前月（2月：699回）と比較して増加しました。
- ・GNSS連続観測では、霧島山深部の膨張を示す変化は認められません。

④の灰色の期間は、新燃西（震）観測点のデータが欠測となっている期間です。

④の青色の領域は、新燃西（震）観測点での計数基準未満のため振幅を検測していない領域です。

⑥の基線は図9の基線⑦に対応しています。

⑥の橙色破線内の変化は、日向灘の地震（2024年8月8日、2025年1月13日）による変動です。

※新燃岳南西観測点の機器障害により、新燃西（震）観測点、霧島南（震）観測点及び高千穂河原観測点で計数している期間があります。

※新燃岳南西観測点が2024年8月16日から障害のため、新燃西（震）観測点南北動成分の3.0 $\mu\text{m/s}$ を計数基準としています。

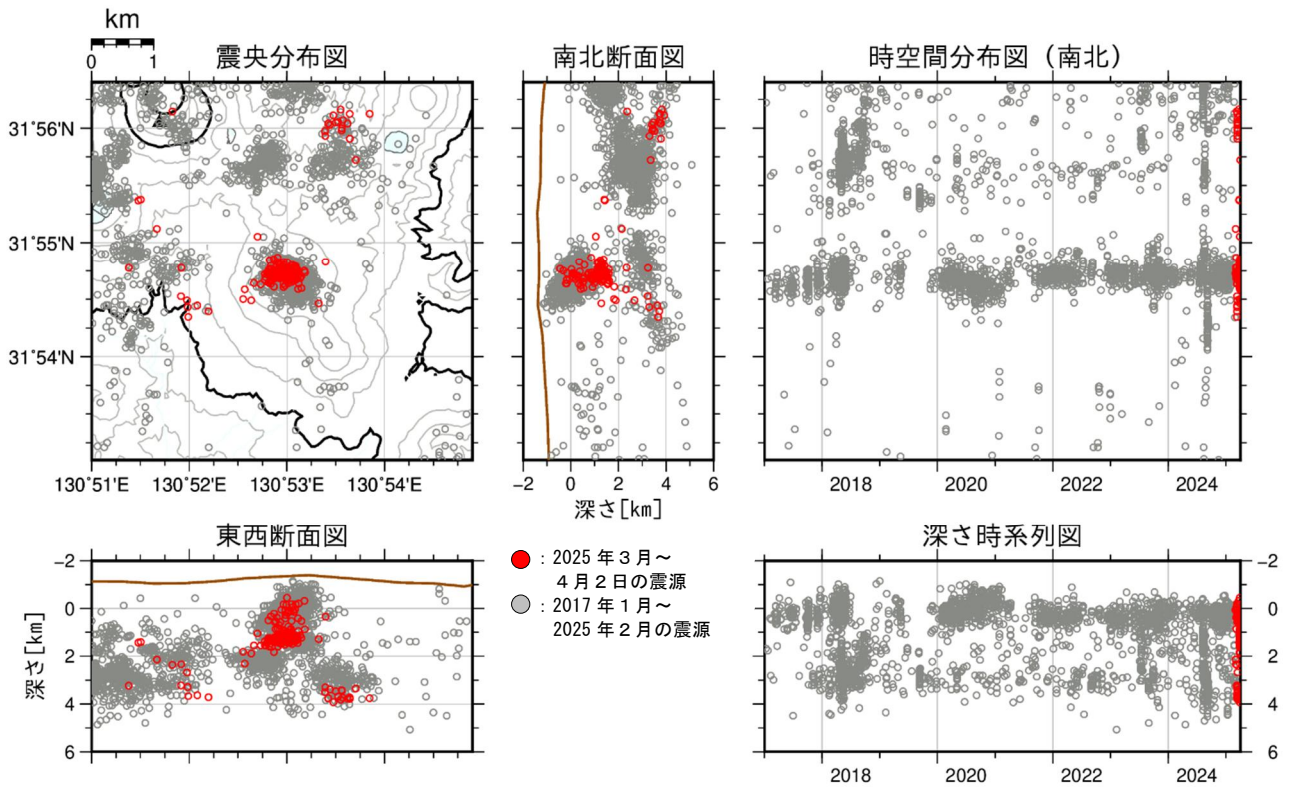


図6 霧島山（新燃岳） 震源分布図（2017年1月～2025年4月2日（期間外））

＜3月～4月2日（期間外）までの状況＞

震源が求まった火山性地震は、新燃岳火口直下の深さ0～2 km 付近及び新燃岳西側の深さ2～4 km 付近に分布しました。

※観測点の障害により、震源が求まらなかった期間があります。

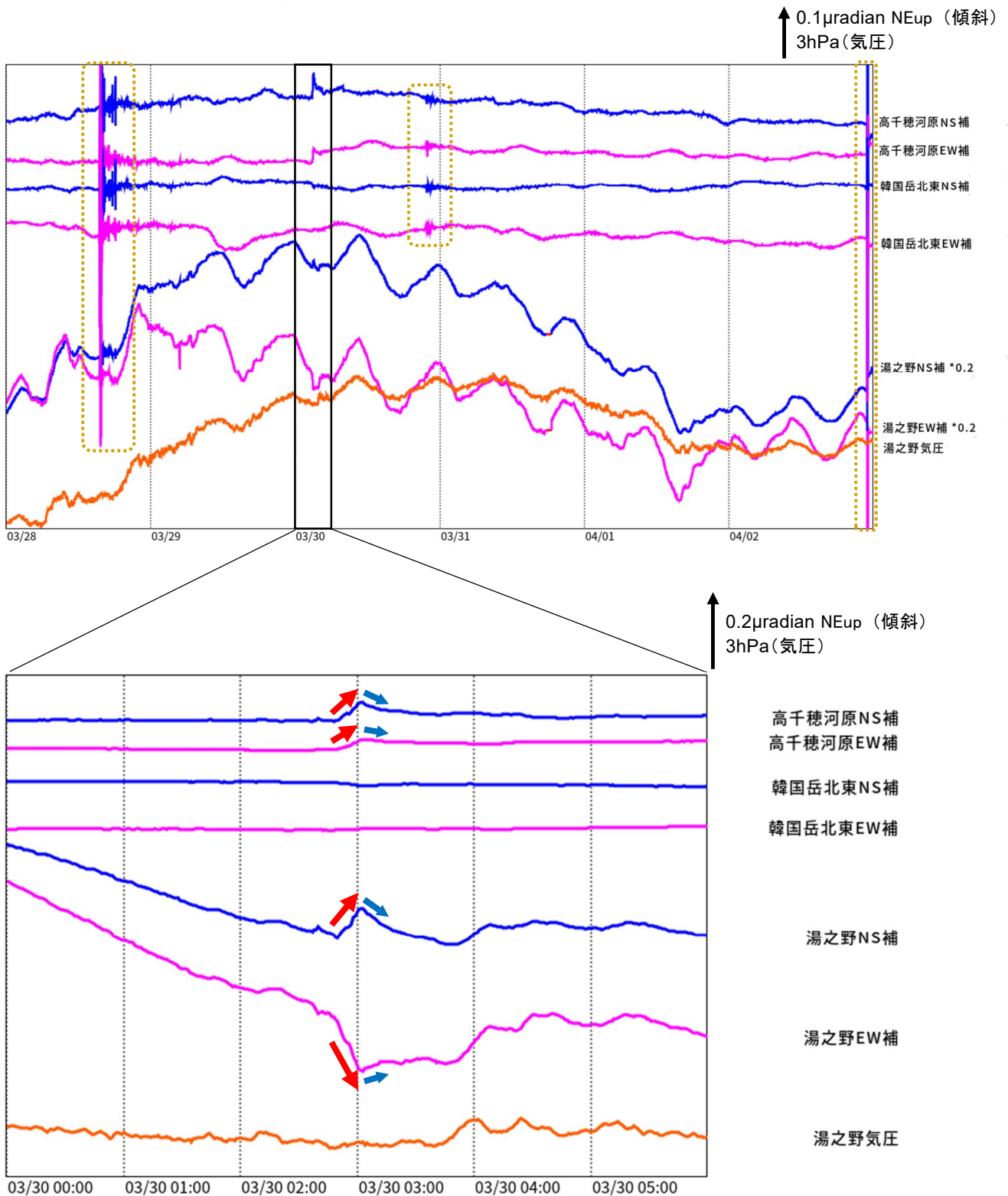


図7 霧島山（新燃岳） 傾斜計による地殻変動の状況（分値）

（上段：3月28日00時00分～4月3日00時00分、下段：30日00時00分～06時00分）

新燃岳近傍に設置している傾斜計では、30日に山体の膨張（赤矢印）および収縮（青矢印）を示す変動がみられましたが、その後は特段の変化はみられていません。

橙色破線内の変化は遠地地震による影響です。

上段の湯之野観測点の傾斜データは、他の観測点と比べて変動量を0.2倍に縮小して表示しています。

湯之野観測点の傾斜データにみられる気圧変動と同期した約半日周期の変動はノイズとみられます。

各観測点の成分名に付記された「補」の文字は、そのデータが潮汐補正済みであることを示しています。

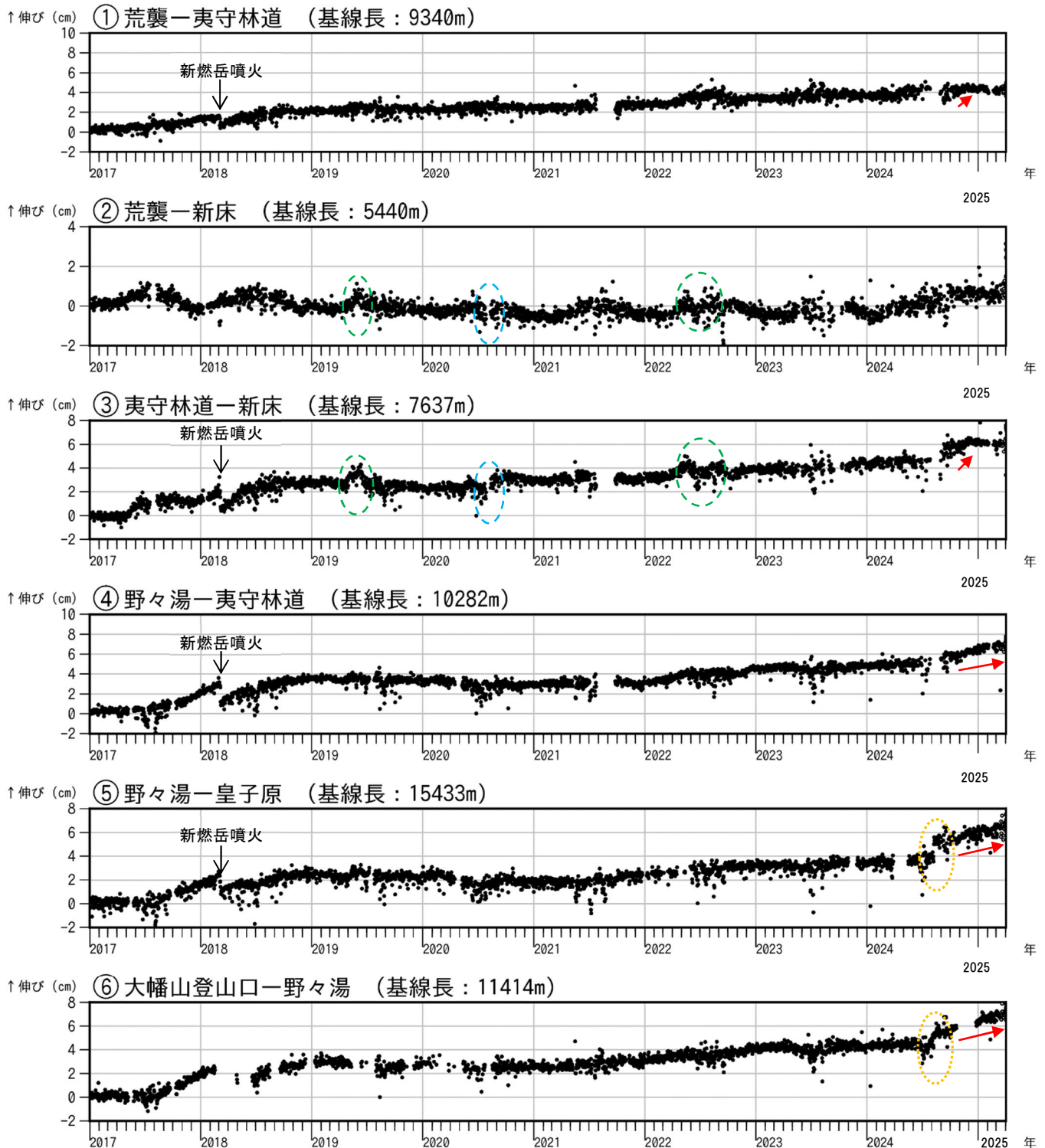


図 8 霧島山（新燃岳） GNSS 連続観測による基線長変化（2017 年 1 月～2025 年 3 月）

GNSS 連続観測では、2024 年 11 月頃から、霧島山を挟む一部の基線で新燃岳付近の地下の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められます（赤矢印）。

これらの基線は図 9 の①～⑥に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

緑色破線内の変化は、新床観測点周囲の環境の変化に伴う影響と考えられます。

水色破線内の変化は、新床観測点のセンサー台交換による局所的な変動による影響と考えられます。

橙色破線内の変化は、2024 年 8 月 8 日の日向灘の地震による変動です。

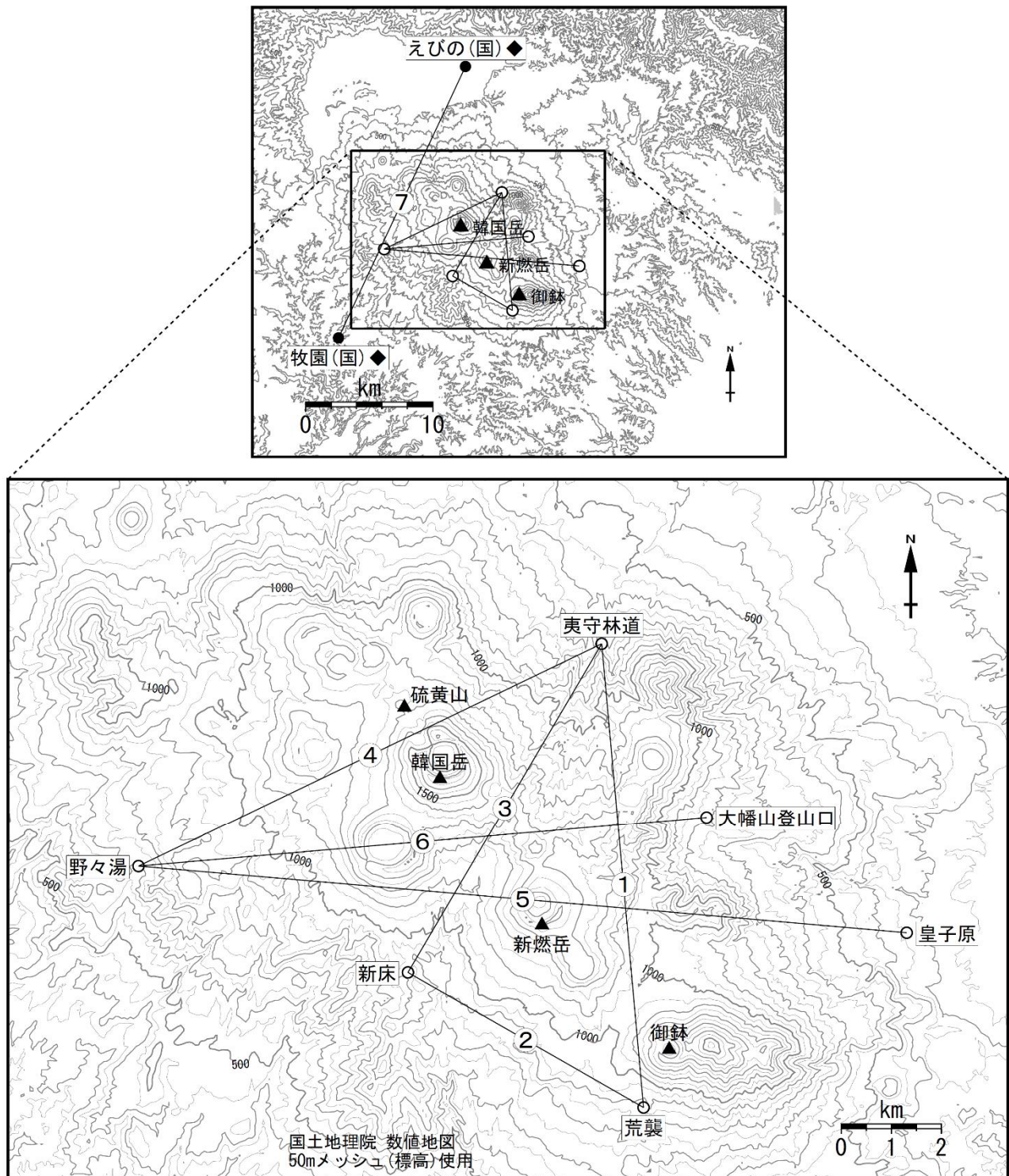


図9 霧島山（新燃岳） GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院

御 鉢

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。

活火山であることから、火口内でごく少量の火山灰等を噴出する規模の小さな現象が突発的に発生する可能性がありますので注意してください。

地元自治体等が行う立入規制等に留意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図1、図3-①）

監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

・ 地震や微動の発生状況（図2、図3-②～⑤）

火山性地震は観測されませんでした（2月：なし）。

火山性微動は2018年2月10日以降、観測されていません。

・ 地殻変動の状況（図4、図5）

GNSS連続観測では、御鉢を挟む基線には、特段の変化は認められません。



図1 霧島山（御鉢） 御鉢の状況（3月10日、猪子石監視カメラ）
監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。

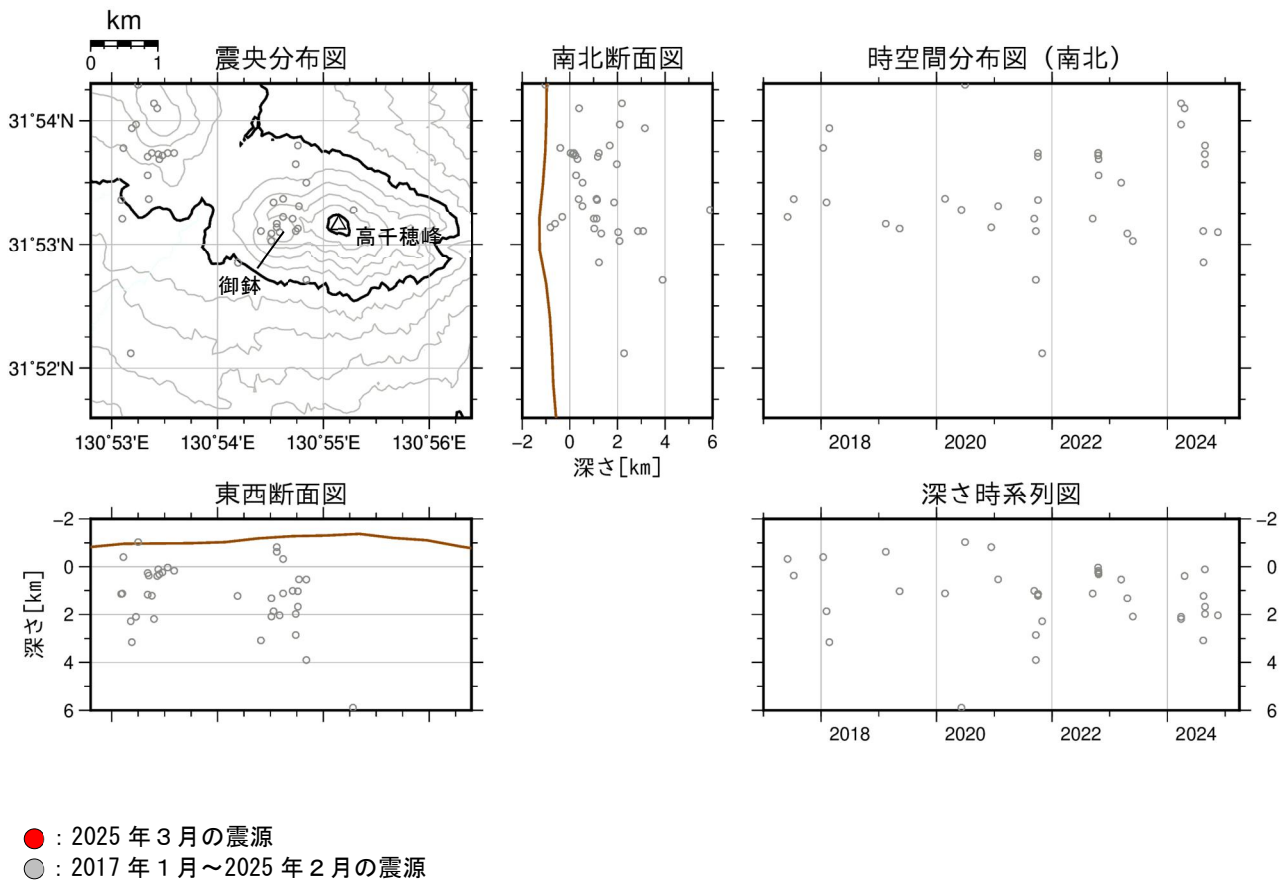


図2 霧島山（御鉢） 震源分布図（2017 年 1 月～2025 年 3 月）

< 3 月の状況 >

火山性地震は観測されませんでした。

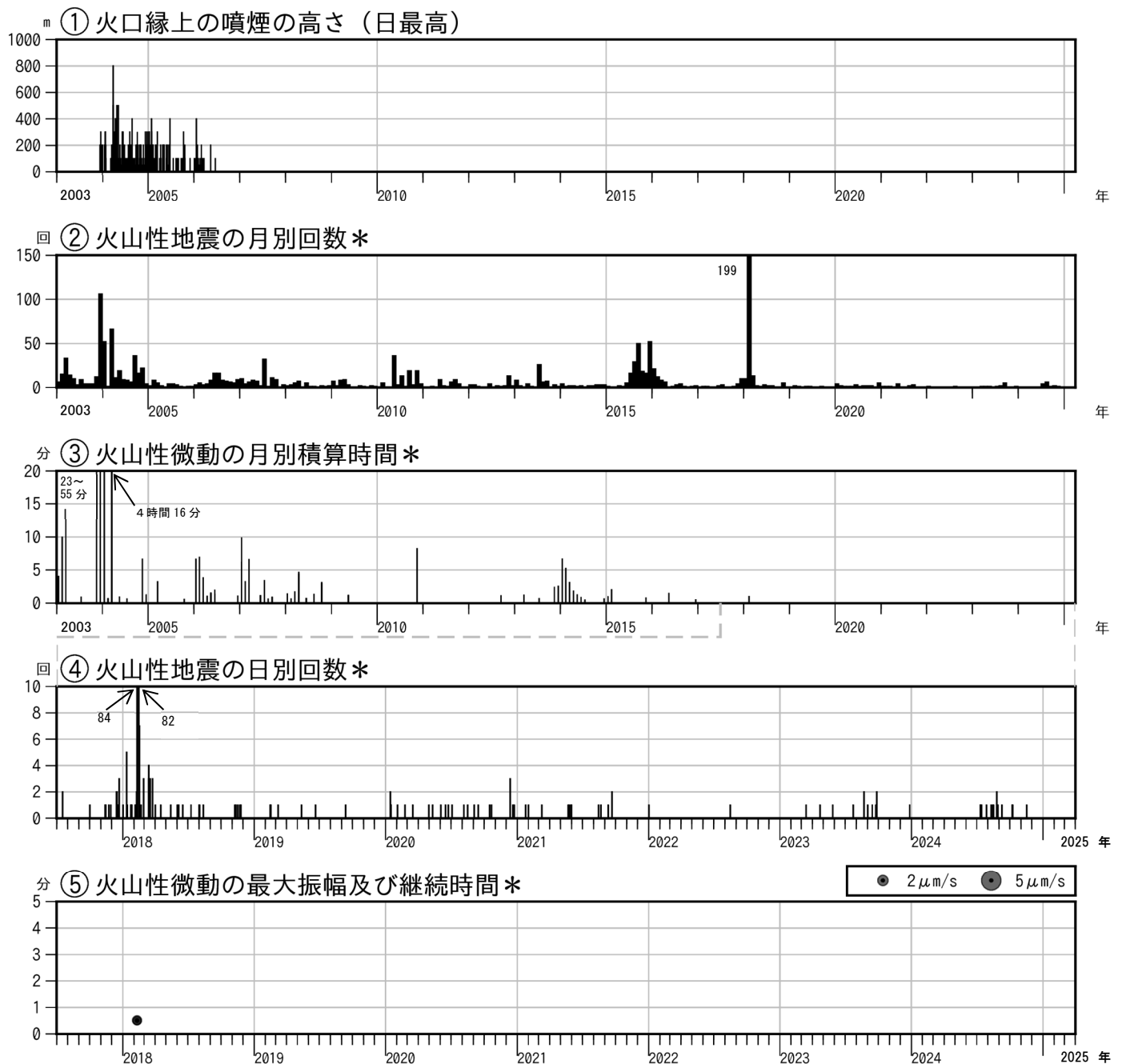


図3 霧島山（御鉢） 火山活動経過図（2003年1月～2025年3月）

< 3月の状況 >

- ・ 監視カメラによる観測では、噴煙は認められませんでした。
- ・ 火山性地震は観測されませんでした（2月：なし）。
- ・ 火山性微動は2018年2月10日以降、観測されていません。

＊「高千穂峰2観測点、高千穂西（震）観測点及び高千穂河原観測点」で計数

（計数基準 高千穂峰2：上下動 $2.0\mu\text{m/s}$ 以上、高千穂西（震）：水平動東西成分または上下動 $1.3\mu\text{m/s}$ 以上、高千穂河原：水平動南北成分または上下動 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上）

2022年8月21日から11月17日まで、及び2023年8月24日以降高千穂峰2観測点は障害のため、高千穂河原観測点で計数しています。

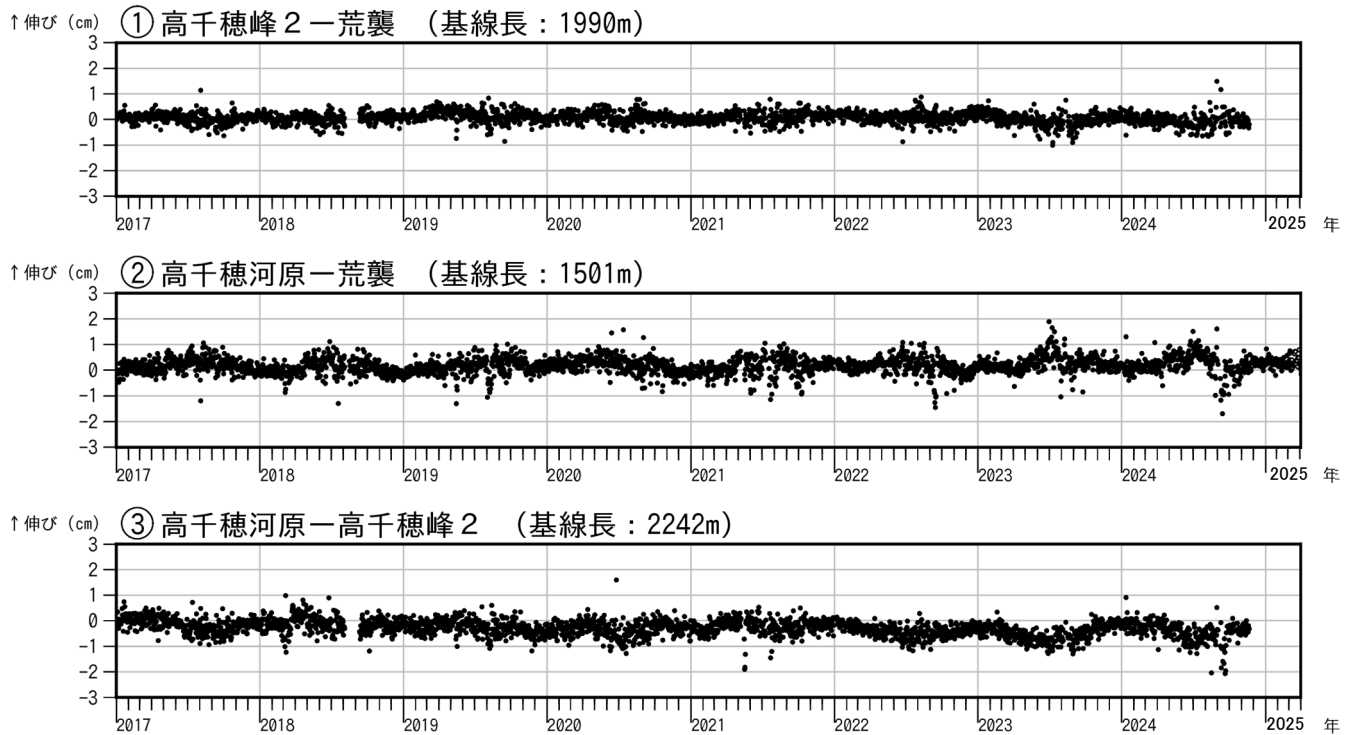


図4 霧島山（御鉢） GNSS 連続観測による基線長変化（2017年1月～2025年3月）

GNSS 連続観測では、御鉢を挟む基線には、特段の変化は認められません。

これらの基線は図5の①～③に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

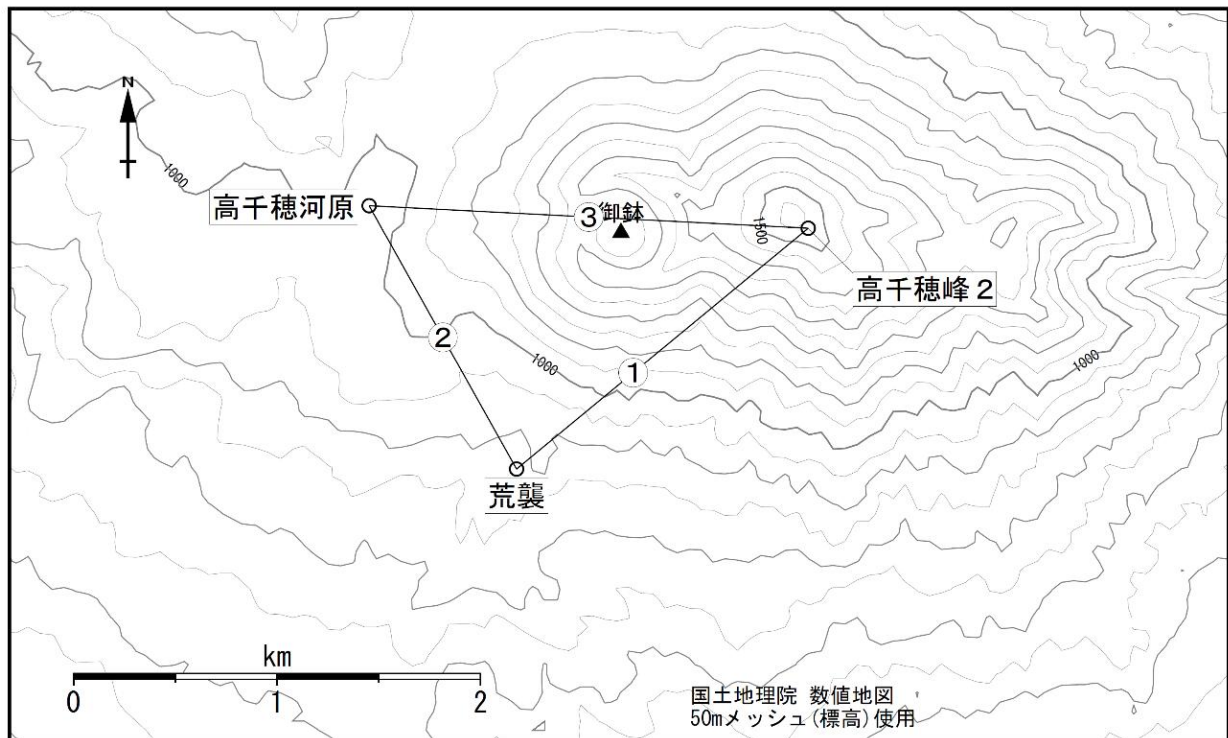
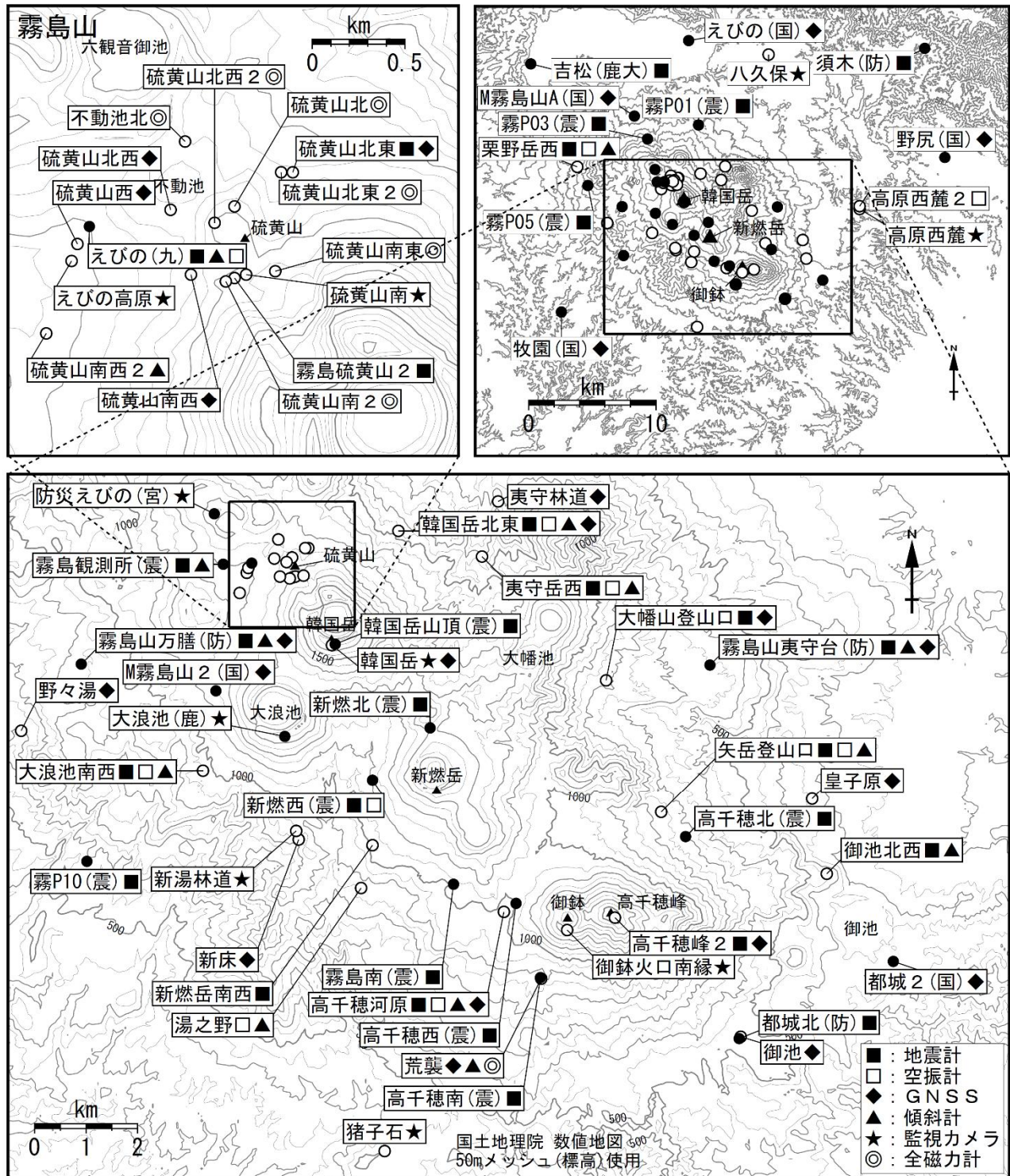


図5 霧島山（御鉢） GNSS 連続観測点と基線番号



霧島山 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国): 国土地理院、(震): 東京大学地震研究所、(九): 九州大学、(鹿大): 鹿児島大学、
 (防): 防災科学技術研究所、(宮): 宮崎県、(鹿): 鹿児島県